

大学1年生の時のある教職の授業のお話

今回は保健室からです。「保健だより」ではなく、「保健室だより」としているのは、ちゃんと意味があるんですよ。

「保健だより」だと「保健」のことしか書けない気がするんです。でも「保健室だより」なら、南高の保健室にいる私が、自由にテーマを書いていいことになると思うんです。

なので、保健と全く関係ないことも書いちゃいますよお！

また原稿を書く時に私が気をつけていることがあります。それは「〇〇しましょう」という「ましょう」を使わないようにすること。「ましょう」は「魔性」の言葉とも言います。一見いい言葉に感じるけど、価値観を一方的に押し付けていることになる言葉だとも私は思うんです。それに、「〇〇しましょう」って言われても、「そうだそうだ、そうしよう」って思っただけで行動にうつしてくれる人はそう多くはないんじゃないかなって思います。少なくとも私は、「〇〇しましょう」って言われても、あまり説得力を感じません。一度それについて考えて、本当にそうなのか、エビデンスを確認できたら「ましょう」を「それは有益」と読み替えて行動にうつすかも。

大学1年生の時、教育原理という授業の担当は名物教授でした。記憶は曖昧なんですけど「生徒に授業をする時に教科書を使うよね。その教科書の内容はほんとに正しいんですか？」という教授の問いに、いろんな学生に意見を求めました。多くの学生は「教科書に書いてあることは正しい」と信じて疑いもしていませんでした。私もその一人でした。しかし教授は『どうしてそれを鵜呑みにしてしまうのか？自分で確認してみる必要はないのか？一般的に「正しい」と思われていることが、本当にそうなのか。一度疑ってみるという視点は重要なんだ』っていう言葉が今でも忘れられません。

それまで私は「一度疑ってみる」というという考えは自分に持ち合わせていませんでした。でもその教授の授業で目からウロコがおちました。その時に、世の中に活字で出回っているものが、全て正しいとは限らないということを教えてもらいました。

教育原理の単位をとるための試験もありました。どんな試験が出るのかは全くわかりません。授業を一度も欠席していなくても、授業自体が概念的だったので、授業で教授が話したことが試験に出るとも思えませんでした。試験問題はもう覚えていません。でも自分なりの考えを書いたつもりです。

その教授は試験で60点に達しなければ、100冊以上の指定の本を提示して、読んだら教授の口頭試問を受けにきなさいと言いました。

試験の結果、私はなぜかAの評価をもらいました。だから口頭試問を受けなくても済みました。

しかし学生の中には、単位をとるための試験より、教授の口頭試問を受けたいという人もいました。

だから敢えて試験は受けなかったり、白紙で出したりした人もいました。

そして相当の数の本を読んで、口頭試問を受けに行った人の話を聞きました。

私は、口頭試問では「この本ではどういうことを著者はいいたかったんだと思いますか？」みたいな質問を想定していました。もしそれが、読んでなかった本だったとしたらアウトだなんて思っていました。しかし、口頭試問では、教授は本のことには一切触れず、学生との雑談で終わったと聞きました。そんなだったら、私は試験でAをもらいたくなかったなって思いました。因みにこの授業でAをとった学生はほとんどいなかったと後で知りました。でもAをとることが価値があったのかな？それよりも、たくさんの本を読んで、ドキドキしながら教授と1対1の対話をする方が、私の人生にとっていろんな示唆を与えてもらったのではないかなと思いました。良い成績をとることは一般的には良いことです。しかし、もっと大切な機会を経験することを逃してしまうこともあるんだなと思った、私の大学生時代の経験でした。

